計画研究　A02　(課題番号：06208103)

# 琉球をめぐる日本・南海の地域間交流史

研究代表者：濱下武志・東京大学・東洋文化研究所・教授

１．研究項目：A02　環東シナ海地域間交流史

２．研究課題名：琉球をめぐる日本・南海の地域間交流史(課題番号：06208103)

３．研究期間：平成６～９年度（1994～1997）

４．交付研究費：平成６年度　7,500 千円
平成７年度　7,500 千円
平成８年度　6,800 千円
平成９年度　6,000 千円　　合計　27,800 千円

５．研究組織(氏名：所属機関・部局・職)
（研究代表者）濱下　武志：東京大学・東洋文化研究所・教授
（研究分担者）荒野　泰典：立教大学･文学部･教授
（研究分担者）村井　章介：東京大学･大学院人文社会系研究科･教授
（研究分担者）高橋　公明：名古屋大学･大学院国際開発研究科･助教授
（研究分担者）原口　　泉：鹿児島大学･法文学部･助教授
（研究分担者）紙屋　敦之：早稲田大学･文学部･教授
（研究分担者）鶴田　　啓：東京大学･史料編纂所･助教授
（研究分担者）五野井 隆：東京大学･史料編纂所･教授
（研究分担者）松井　洋子：東京大学･史料編纂所･助教授
（研究分担者）弘末　雅志：天理大学･国際文化学部･助教授
（研究分担者）菅谷　成子：愛媛大学･法文学部･助教授
（研究分担者）黨　　武彦：専修大学･法学部･講師
（研究分担者）浅見　雅一：東京大学･史料編纂所･助手
（研究分担者）原田　至郎：東京大学・東洋文化研究所・助手(平成９年度)

６．研究目的

本研究班の課題は琉球の三山統一以前から幕末維新期までの時期の琉球－日本交流史及び琉球－南

海交流史を、環東シナ海の地域間交流の一環として、位置づけなおすための実証的歴史研究を行い、それに関する歴史史料情報を蓄積することであった。

従来の琉球をめぐる関係史・交易史においては、たとえば日本側の史料を用いた薩摩・琉球関係の研究、あるいは『歴代寶案』を主たる史料として用いた『中世南島通交貿易史』の小葉田淳の研究、『黎明期の海外交通史』の東恩納寛惇の研究等の朝貢関係を主軸とした中国・琉球・南海の関係の実証的研究などがあり成果を挙げていたが、研究の進展にともない、新たな視角において東アジアにおける地域間交流の要、すなわち「万国之津梁」として繁栄した沖縄の歴史的研究を深化させていく必要にせまられている状況にあった。したがって、具体的に研究を進めていく上で以下に述べるいくつかの留意点を考慮した。

まず琉球－日本関係について、

(１)日琉関係を琉球が主体的に営んできた多様な諸関係のうちの一つと位置づけなおすこと、これは、いわゆる「古琉球」の時代においてはいうまでもないことだが、島津氏の「琉球入り」以後においても、その可能性を含めて念頭においた。

(２)日琉関係を、薩摩や幕府との関係のみにとどめず、列島上の多様な地域、階層との関係の中に位置づけなおすことにした。また、それらの多様な関係を発掘することにした。その多様な関係は、地域でいえば蝦夷地（現北海道）にまで及ぶし、階層でいえば、例えば、漂流や江戸上りの使節など、庶民レヴェルにまで達するはずであるという問題設定であった。

次に琉球－南海関係について、

(１)琉球の地域間交流において重要な周縁部分である東南アジア地域をも包摂する南海を軸とした地域間交流史の研究は、交流・移動の問題が東アジアにおける歴史研究の動向のなかで重要視されるようになった当時においても、未だ不十分といわざるを得ない状況にあった。南海という地域に着目すること自体が琉球の歴史的研究において極めて重要な視点であることを十分に認識した上で研究を進めていくこととした。

(２)研究を深化させていくには従来あまり顧みられなかった史料群を発掘し情報化していくことが必要であるとの認識を確認した。具体的には東南アジアとの交易関係、あるいはイエズス会等のキリスト教布教を通じて残された、ポルトガル語、オランダ語、スペイン語等のヨーロッパ諸言語で記述された史料がそれに当たる。また、中国史料においても従来用いられてきた『明実録』『清実録』等の周知の史料の他に、未整理の膨大な琉球・南海関係の史料群が想定された。

以上の留意点を十分にふまえながら、基本的な史料は勿論、従来見逃されがちであった史料情報の系統的な検討において南海・琉球・日本の相互関係の政治的・経済的・文化的な総合的理解を実現することは、今後の研究全体に対して、また琉球に関する基本資料のデータベース化という主旨からも、もっとも必要とされる基礎的な作業であると位置づけた。

上記の研究目的を達成するにあたって、各研究分担者の専攻分野を鑑み、大きく琉球-日本交流史グループ（A班）と日本-南海交流史グループ（B班）に分けた。

A班は、研究分担者荒野が統括した。A班はその研究対象によって、(ｱ)中世の日琉関係、(ｲ)近世の日琉関係、(ｳ)中・近世の琉球と朝鮮との関係の三本の柱を立て、(ｱ)は村井・高橋、(ｲ)は荒野・紙屋・原口・鶴田、(ｳ)を研究協力者孫がそれぞれ担当する体勢をとった。

B班は、研究代表者濱下が統括した。B班はその対象へのアプローチによって(ｱ)中国史料からみ

た琉球と南海、(ｲ)東南アジアからみた琉球と南海、(ｳ)外国史料にあらわれた琉球と南海、(ｴ)海外所在史料における琉球と南海、といった琉球と南海を軸とした四本の柱を立て、(ｱ)は中国経済史の 濱下と中国近世史の黨、(ｲ)はインドネシア史の弘末とスペイン植民地期のマニラ史の菅谷、(ｳ)はベトナムキリスト教史の五野井と日蘭交渉史の松井、(ｴ)は研究協力者である呉密察、LEE Cheuck Yin がそれぞれ担当する体勢をとった。研究の過程において、(ｳ)に浅見が加わり、さらに、アジア地域間交流の観点から国際政治学専攻の原田が加わった。

A・B両班の各研究者は、以上の分担に従ってそれぞれの視点からいかなる史料が存在し、歴史情報として蓄積されてきたかを分析し、相互に緊密な連携をとることによってより質の高い史料情報の蓄積を可能たらしめ、さらに国際的な学術交流を推進することをめざした。

また、A・B班とも、テーマ上またメンバーの構成上、多くの言語の史料を扱わなければならない。それ故にデータ化については特有の問題が生ずることもあるが、逆に議論を進めていくに過程でのそれぞれの史料における琉球観の相異というものの摘出を念頭に置いた。

それぞれの班の特色は、A班が現地調査を主として、内から外へという方向性で琉球にアプローチしようとし、B班は日本語以外の様々な言語の史料を駆使し外から琉球をとらえるという視点でアプローチしようとした点にあった。この二つのアプローチは相互に補完され、最終段階を迎えた今振り返ってみても非常に理想的な班構成であったと思われる。

## ７．研究経過と研究成果の概要

以上の目的と研究体制のもと、各年度において以下のような成果をあげることができた。

### 平成６年度

平成６年度においては課題の共通認識を得るため、討論の場を設け、課題についての研究史の整理を行い、その時点までに確認された研究成果を共同研究者の共通のものとしていった。

史料の収集について、史料の３つのレヴェルにおいて分別し、体系的な史料収集につとめた。第１のレヴェルが島津家文書（東京大学史料編纂所蔵）や『通航一覧』などの刊本である。また目録が完備された主に東京・京都に所在する漢籍史料もここに含まれる。第２のレヴェルが、各種史料所蔵機関に所蔵されている史・資料、あるいは史料群・所蔵機関は首都圏から、九州各地、岡山、京都、名古屋、さらには仙台・青森などに跨って存在するもの。第３のレヴェルは、未採訪史料。これも、種子島や屋久島、トカラ列島、旧薩摩藩領に残っている諸家文書、琉球使節の江戸上り関係史料、昆布関係（蝦夷地－日本海沿岸）史料、さらには、韓国ソウル大学奎章閣文庫、中国第一歴史档案館、タイの国立図書館、オランダ国立中央文書館等の海外史料もこれに当たる。第２のレヴェルは目録によって一つづつ調査をし、第３のレヴェルは、さまざまな調査報告、あるいは個別の研究論文などによって情報をつかむことから始めた。基本的に研究を離陸させるための準備の年度であった。

### 平成７年度

平成７年度においては本格的に研究が始動し、以下のような成果をあげた。A班は、前年度に引き続いて９月に実施した奄美大島調査で、遺跡現地や大和村役場において村議や村職員に対して原口・村井が遺跡についての所見を述べるなど、地元自治体との交流も行い、琉球史上で奄美のもつ独自の重要な意義を確認することができた。また１月に奄美で行われたシンポジウム「奄美の琉球史料」にも、原口が参加した。８月に沖縄県文書館で行われたシンポジウム「沖縄の歴史情報研究の課題」で

は、村井が「中世国家の境界と琉球・蝦夷」と題して講演を行った。またこの講演で言及した薩南諸島が見える中世古文書に関連して、３月に鹿児島県で調査を実施した。データベースとしては、高橋が「前近代の日本文学における琉球・南島像」を作成した。

B班は、以下に述べるような作業を進行させつつ、作業全体を見通す枠組みの検討を行った。データベース作成作業としては、濱下が香港の研究協力者蔡博士とともに乾泰隆商業史料のテキストデータベース化を、松井が東インド会社史料目録の入力を進行させた。研究会活動としては、メンバー全員が沖縄の東南アジア学会に参加して、全体の方向性を討論した。また、一月には浅見が「スペインのアジア関係資料について」と題する研究報告をおこない、そこでは史料全体のあり方からいかに琉球・奄美関係史料にアプローチしていくかが議論された。その他の作業としてはまた濱下・黨が中国の档案史料の分類目録の作成をめぐる議論を進行させた。黨が「中国第一歴史档案館の所蔵史料について」という報告をおこなったのはその一環である。また、日本所在の档案史料の情報収集と目録作成も準備し、東文研所蔵の仁井田・今堀各氏旧所蔵の民間文書に関する基礎的データの入力について具体的な議論を開始した。これは平成９年度に一つの成果となる。

平成８年度

平成８年度は、A班が、5 月に原口・荒野・村井・高橋が鹿児島県下史料調査を行い、11 月 6 日～7 日、3 月 26 日～29 日の二度にわたり荒野・高橋が神戸市立博物館を訪問、同館所蔵の世界図の調査を実施し、第１回目は、主に、調査の可能性について、館側に打診するとともに、目録や図録を入手するなどの情報収集を行い、第 2 回目は、学芸員の三好唯義氏のご好意で、近世の日本で描かれた世界図 35 点、朝鮮で描かれた世界図 26 点を調査し、琉球の描写の有無や描かれ方をチェックした。5 月には荒野が横浜市立大学図書館鮫沢文庫の調査をした。世界図よりも、世界地理書を中心に情報収集を行った。

B班は、9 月 27－29 日に五野井・浅見が長崎・平戸において開催された研究会「環シナ海地域間交流と平戸・長崎」に参加、3 月 17－19 日に長崎県立長崎図書館において渡辺文庫を中心に調査し、長崎貿易史料及びオランダ通詞・東京通詞・唐通詞関連史料について撮影した。

平成９年度

平成９年度は、A班は、１２月に荒野が前年度調査による「世界図に見る琉球」を発表した、紙屋が早稲田大学図書館で調査した琉球関係図書・文献のデータ(カード)は、入力済み。また、A班がこれまで鹿児島県下で行った調査の関係資料は原口のもとにあるが、これを荒野のもとに送り、重要なものをピックアップしてスキャナで読み込んだり、キャプションを付けるなどして班の報告書の材料に利用し、主要なものについては、別途冊子の形でまとめることを予定している。。

鶴田が前年度に経費を取って作成した「通航一覧・琉球国部」は、史料編纂所所蔵本(外務省引継書類写本)の内、「琉球国部」部分の本文テキスト(約 256KB)と画像データ(CD-ROM/TIFF G4 形式 100 キロバイト弱×約 1000 コマ)である。史料編さん所鶴田のホームページで公開している。

B班は、松井がバタフィア発信書翰控簿(Batavia's Uitgaand Briefboek 以下ＢＵＢ)(オランダ国立中央文書館所蔵　東大史料編纂所所蔵マイクロフィルムによる)に所収の書翰の目録のデータベース化と内容検討を行い、１０月に研究発表「１７世紀オランダ東インド会社文書に見る日本と南海」も行った。データ項目は、「番号」「開始ページ」「終了ページ」「日付」「宛先地」「文書形式」「宛先人経由など」「フィルム番号」「所蔵者番号」「備考」。 さらに件数を蓄積し、また修正を終えてから将来

的には公開の予定(史料編纂所所蔵のオランダ東インド会社文書マイクロフィルム目録の一環となる)。濱下は『許舒博士所蔵商業及土地契約文書乾泰隆文書』のテキストデータベースを完成したが、Big-5 コードでのデータのため、現在どのような形にするかを準備中。

各研究班による研究成果の取りまとめについては、冊子体によるものを発行することを決定している。今後は個々にとりくまれた成果を共同研究の成果として結実させていくためにさらなる討論の必要があろう。(研究業績目録省略、13.03「研究論文等研究業績一覧」を参照のこと)